

中学校の学級経営における教室掲示の活用について

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
146043 野口 朝生

中学校の学級経営における教室掲示の活用について

野口 朝生

生徒指導力高度化コース

要約：本研究では、日常的に行われているがあまり研究のされていない中学校の通常学級における教室掲示に着目し、いくつかの実際の教室の掲示物について、学級の掲示方法の共通点やねらいだけでなくその学級担任の指導等も合わせて事例検討を行い、より良い教室掲示の方法について考察した。いくつかの事例の中で本研究では特に特徴的であった2つの事例を取り上げて検討し、そこにはユニバーサルデザインの視点があること、効果的に教室掲示を行っている学級では学級担任がその掲示物の使用目的を明確にしていることが明らかになった。また、このような視点で教室掲示を含む教室環境づくりを行うことは学級経営の視点から見ても、望ましい学級集団を形成する上で非常に重要な要素となると考えられた。生徒の実態や担任の方針によって具体的な方法は違うが、今後教室掲示を含む教室環境づくりについても研究が進められることが望まれると指摘した。

キーワード：中学校 教室掲示 教室環境づくり ユニバーサルデザイン 学級経営

はじめに

本研究では「教室掲示」を日本の学校教育において学級担任が教室内に生徒の作品や各活動の役割分担表等の生徒の学校や学級での生活の充実を図る上で必要と考える諸情報を掲示することと定義する。教室掲示における掲示物は、その学級に在籍する生徒の作品や学級目標、学級や班活動における生徒の役割分担の表など、掲示物の作成者やその形式も多様である。

小学校では担任が各教科等の指導を一手に担うため、教室掲示においても教科に関連するものを貼ることができるが、中学校においては教科担当制のため、教科学習に関連するものを教室に貼るには様々な制約がある。

生徒指導提要によれば、生徒指導は学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つものとされている。そ

の際、単なる問題行動等への対応という消極的な生徒指導だけにとどまらず、積極的な生徒指導を推進しなければならない。積極的な生徒指導とは、開発的・予防的な生徒指導とも言われるものである。片山（2011）によると予防的な生徒指導とは、問題行動ができるだけ深刻なものとならないように、早期発見・早期対応を基本として、教育計画を立て生徒指導を実践していくことである。また開発的な生徒指導とは、育てる生徒指導とも言い、子ども自身で問題を解決し、自己選択できるよう、またより良く生きることができるよう、積極的に取り組んでいく生徒指導のことである。しかし、瀬戸（2006）によると、積極的な生徒指導や消極的な生徒指導という子どもたちに対して求められる生徒指導は、一人の教師が担当するにはすでに実践困難な領域まで広がっている。

教室という生徒が日常の学校生活の大半を過ごす環境にある掲示物の役割や効果について学級経営や生徒指導の観点から改めて考える必要がある。その際、小学生と中学生の発達段階の違い等も考慮すると、中学校においては、小学校での教室掲示の手法をそのまま取り入れるのではなく、教室掲示がより効果的になるように工夫する必要があるのではないだろうか。

第一章 研究の目的

学級経営において教室掲示は日常的に行われていることである。しかし、通常学級における教室掲示に関して有田ら（2006）や堀内ら（2003）が行った研究は、小学校を対象としたものであり、その研究の数も少ない。中学校における教室掲示に関してはこれまで各学級担任の実践にゆだねられてきたところが大きい。しかし、児童生徒が学校での活動時間を教室という学習環境の中で過ごすにあたって、そこにある掲示物の影響を無視することはできない。

教職専門実習Ⅱにおいて、筆者は学級開きの際の教室後方の掲示物の配置を実践した。その際の担当教員のアドバイスから、教室の掲示物についてもその学級の生徒への配慮やねらいをもって配置する必要があることを学んだ。また掲示物は生徒にさまざまな情報を適時、継続的に提示することができる。教室掲示の方法には決まりはなく、その学級に在籍する生徒の実態や学級担任の指導方針等によって違いはあるが、いくつかの学級では共通点も見受けられた。そのため本研究では、教室掲示の実例を調べて考察することを通して、より良い教室掲示の方法について模索したい。

第二章 研究の方法

本研究では京都府内のある公立中学校において、筆者が特に教室の掲示物について特徴的であると感じた学級を対象として調査を行った。学級での指導と教室の掲示物との関係性を明らかにするため、対象とした学級において掲示物の配置等の意図などについて学級担任へインタビューを行い、教室掲示を撮影した写真から作成した模式図と合わせて考察を行った。

第三章 事例検討

○事例 1

この学級は学級規模が小さく、20 人程度しか在籍していない学級である。この学級には特別な支援や配慮が必要と考えられる生徒 A が在籍している。生徒 A は教師が名指しで指示しなければ自分に指示されていると分からないことが多い。また、教師が学級全体に向かって話をしているときは、自分には関係がないと思っている様子である。教師は時に名指しをしたり、その生徒が分かるように学級全体に対しての確認をしたりと、「君にも話している」というサインを出すように工夫している。

この学級では教室前方には継続的に掲示しているものはなく、教室後方が掲示スペースとなっている。図 1 に教室後方の模式図を示す。

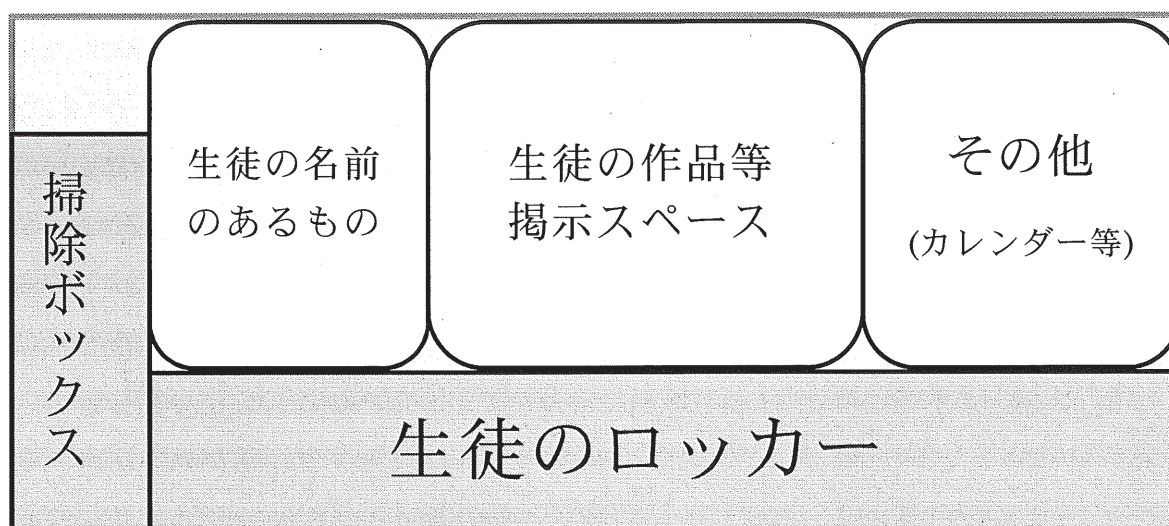


図 1. 事例 1 教室後方掲示スペース模式図

図 1 のように、この学級では教室後方の中央部は生徒の作品等の掲示スペースとして活

用している。そこから向かって左側には主に生徒の名前の書いてある掲示物（例えば日直、給食当番表など）を、向かって右側には主にその他の生徒の名前の書いていないもの（例えばカレンダー、時間割表など）を掲示している（避難経路図のように廊下側に掲示することが効果的と考えられるような、生徒の名前の有無よりもその掲示目的を重視した例外も一部にある）。

このように配置する理由としては、生徒Aが名前の書いてあるものがさまざまな場所に配置されていると混乱してしまうということが挙げられる。名前の書いてあるものと書いていないものを左右に分けて配置することで生徒Aにとって分かりやすく、活動しやすい環境となるのである。この学級の担任Bは「特別な支援の必要な生徒にとって分かりやすい掲示物の配置は他の生徒にとっても分かりやすい」と述べていた。

また、担任Bは授業時間や自分の役割等を確認してきた生徒によく「後ろに貼ってあるから自分で確認しなさい」と指導していることがあった。このように指導することで、すべてを教師が指示する必要がなくなる。生徒が掲示物を活用できるように学級のスタート時から指導を行っていくことで生徒も教師に頼りきりにならず、掲示物を活用して自ら判断し活動することが可能になるのではないだろうか。

また、担任Bは図1の「生徒の名前のあるもの」の部分を上段と下段に分け、その掲示物の特性に合わせた掲示を意図的に行っていた。下段は生徒の目の高さであるため、教師が生徒に意図的に見せたいものを配置している。上記で生徒の名前の有無の例外として挙げた避難経路図などが一例である。避難経路図は普段使用することがあまりない、使用頻度の低い掲示物といってよいだろう。しかし、避難経路図は非常事態が起こった際には混乱を避けるために活用すべきものであり、非常事態が起こってから確認していたのでは間に合わないので事前に確認しておく必要がある。担任Bはこのような掲示物を意図的に下段に掲示することによって、生徒の目に入りやすいようにしている。休み時間等に生徒は教室の後方に集まっていることも多い。そのような日常的な一場面で生徒の目に留まるような配慮を行うことで少しでも目に留める機会が増えるようにしているのである。

上段については、生徒の目線より高い位置にあり、生徒にとっては見づらい位置である。しかし、担任Bはあえて上段に日直当番表や給食当番表などの毎日使用する使用頻度の高いものを掲示する。それらの掲示物は生徒が日常生活で様々な活動を行う際に必要になる。そのため生徒は、多少見づらい位置にあっても自ら見ようとする。

このように、生徒の目線や日常の活動などに関連付けて掲示物を貼る高さについても工

夫することが必要であることが分かる。

教室後方向かって右側の、主に生徒の名前の書いていないものを掲示しているその他のスペースには、カレンダー等を掲示している。このカレンダーには、4月からの1年間の行事予定を担任教師が記入しており、生徒は自由に見ることができるようになっている。この学年では、「先を考えて動く」ということを折に触れて生徒に指導していた。そのことから考えると、このカレンダーによって数か月先のことも見るできるようになっていることから、学年での指導とも関連付けていることが推測できる。

このように意図的な配置を行い、教師がそれを活用するような指導を行っていくことによって、生徒は教師に頼りきりになることが減り、分からないことがあれば自ら積極的に掲示物を活用するようになる。そのような姿勢が生み出されることで、生徒がそれらを活用して自ら問題解決を行うようになるのではないだろうか。生徒がそのように掲示物を活用することは、自己指導能力を育成することにもつながる。

また、その他のスペースには、高等学校その他のパンフレット等が置いてある。学校として、生徒に早い段階から高校進学を意識させるような指導を行っているため、生徒がいつでも手に取ることができるような配慮であるが、保護者に対する啓発のねらいもある。学校公開等で保護者が授業参観に来た際に廊下から授業を参観する保護者が多いため、高校関連の資料を教室の奥（後方向かって右側）のスペースに配置している。高校に関する情報を求める保護者を教室の奥まで進ませようという意図である。

○事例2

この学級は教室掲示のみならず教室環境づくりにも工夫している学級である。同じ学校内の他の学級に限らず、筆者がこれまで見てきた中学校の通常学級では見られないような様々な工夫がされていたため、本研究で取り上げることとした。

掲示については、他のクラスにもよく見られる教室の前後の掲示スペースのほかに、教室の左右の壁にも写真等の掲示を行うなど、非常に特徴の見られる学級である。教室環境づくりについては、生徒の机の配置などに他のクラスでは見られなかった特徴が見られる。教室の左右の掲示スペースやその他の教室環境づくりについては後で述べることとし、まずは事例1と同様に主な掲示スペースから検討を行う。

この学級では教室前方と教室後方が主な掲示スペースとなっている。まず図2に教室前方の掲示スペースの模式図を、図3に教室後方の掲示スペースの模式図を示す。

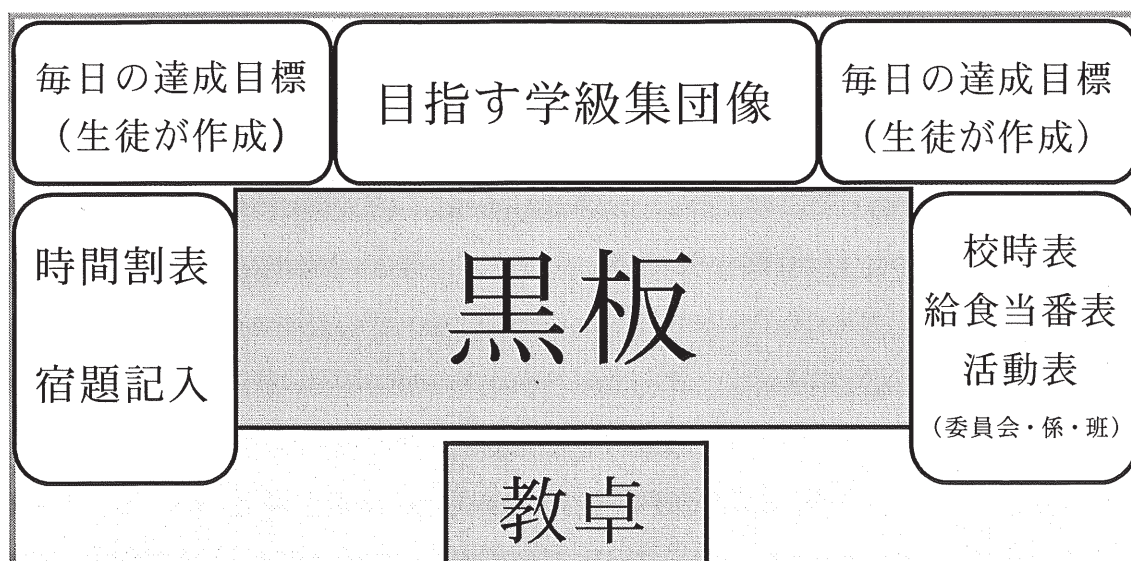


図 2. 事例 2 教室前方掲示スペース模式図

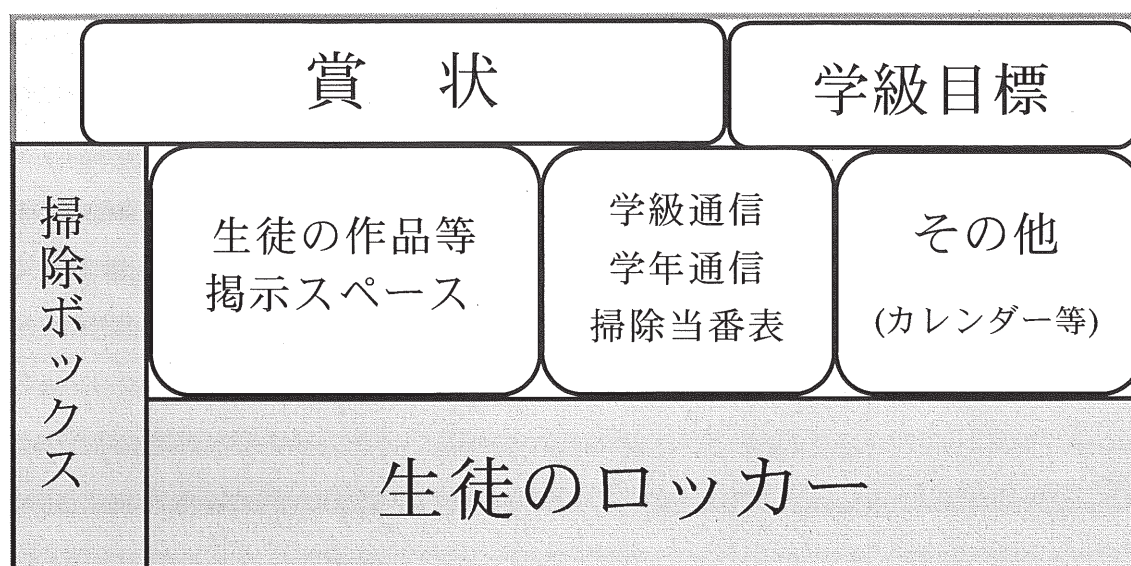


図 3. 事例 2 教室後方掲示スペース模式図

この学級では教室前方に目指す学級集団像と、それを目指すに当たっての生徒が自ら決めた「毎日ちょこっとこれだけは頑張る」という毎日の達成目標を合わせて掲示している。生徒がそれぞれ決めた目標を前方に掲示することでいつでも確認できるようにしている。

また、教室後方にはそれとは別に学級目標が掲示してある。この学級の担任 C は学校や学級が変わっても同じ学級目標を変更することなく使用している。担任 C は、『いつも元気よく挨拶するクラス』『笑顔が絶えないおもしろいクラス』『仲間を励まし、認め合える

クラス』『みんなのことを心から考えるクラス』『本気になって一つのことに取り組めるクラス』というこの5つの学級目標は、日常生活や学校行事などのどのような場面においても活用できるものであり、これさえできれば良い学級になると思う。」と述べていた。

このように目指す学級集団像と学級目標という、ある意味では同じようなものを作成する担任Cのねらいとしては、教室前方には目指すものを掲示することでそれぞれが決めた目標をいつでも確認できるようにし、教室後方には必要に応じて振り返るものを掲示したいとの思いからである。

教室後方の掲示スペースは事例1とは異なり、教室後方向かって左側に生徒のプロフィール表が掲示してあり、中央に学級通信や学年通信、掃除当番表が掲示してある。生徒の作品等が掲示スペースの中央でないのは、作品などは頻繁に見るものではないため、どの位置からも確認しやすい中央に、生徒に見せたいものや生徒が見る必要があるものを配置しているとのことだった。

次に事例2の冒頭にも述べたように、この学級の特徴的な教室環境づくりについて述べる。図4に教室全体の模式図を示す。

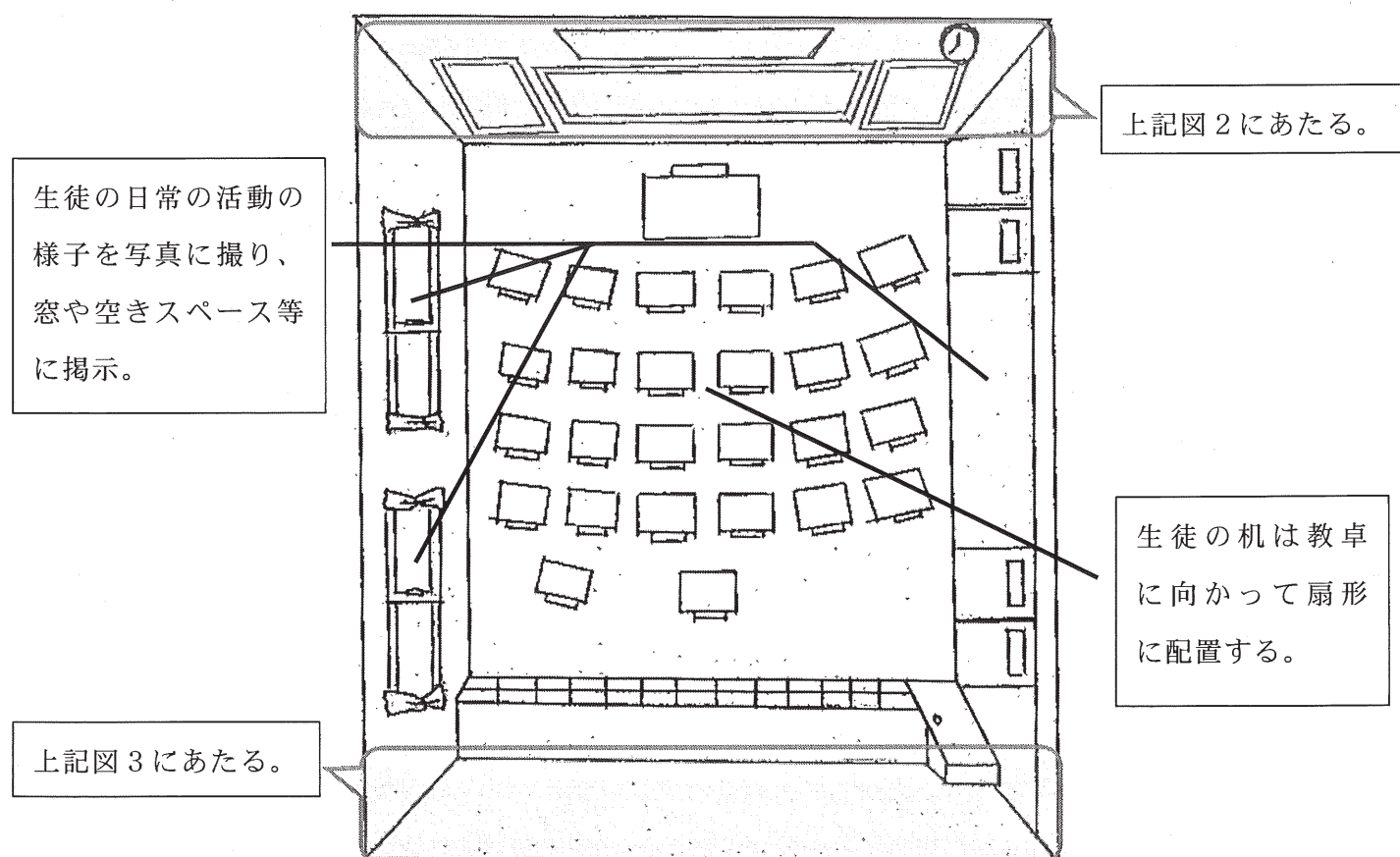


図4. 事例2教室全体模式図

まず、教室左右の掲示物について検討する。教室の左右の窓には生徒の普段の様々な活動の様子を撮影した写真が貼られている。担任 C は、「生徒たちが自分の部屋に好きなもののポスターを貼るような感覚で貼っている。教室を自分の部屋のように感じてほしい。」と述べており、あえて教室の窓や空きスペース等に写真を掲示しているようである。また、「学級の外に向けてアピールするでもなく、教室の中に入らないとこのような掲示になっているとは分からないようになっている」とも述べている。生徒にとっては教室に独自性が生まれることで、より自分の学級や教室に愛着を持つのではないだろうか。

次に特徴的なのが、生徒の机の配置である。教室前方中央にある教卓に向かって扇形に配置されている。中学校の通常学級では、すべての机を黒板に向かって真っすぐになるように縦横を揃えた状態がよく見られる。この学級も当初は一般的な机の配置であったが、扇形の配置に変更した。これは教室の左右の端の列、特に最前列の生徒は黒板が斜めを向かないと見えないこともあり、よく頬杖をついた状態で授業を受けていることを気にした担任が決定したものである。担任 C によるとこのような配置にすることによって実際に頬杖をつくことは減っているとのことであった。

このような教室環境づくりは、どのような状況でもできるというものではない。この学級には注意欠陥傾向のある生徒が在籍していないことから、担任 C も「もし学級内にそのような生徒がいれば、今のような教室とは全く違う環境を考えたと思う」と述べていた。このことから、担任 C にもユニバーサルデザインの視点が存在することがわかる。

第四章 総合考察

第三章で取り上げた2つの学級だけでなく、他のいくつかの学級でも発達障害やその傾向のある生徒、色覚異常等を含む身体的な配慮事項のある生徒に配慮した考え、つまりユニバーサルデザインの考えを用いた教室掲示や教室環境づくりが見られた。多くの学級においてそれぞれの学級に在籍する生徒の特性に合わせた教室環境づくりがなされ、生徒が困難さを感じないような工夫がなされていた。この考えを欠いた教室環境では、一部の生徒はそれぞれの特性から教室での活動に何らかの困難さを感じるおそれがあるだろう。生徒が困難さを感じることは、教師にとっても生徒にねらい通りの活動をさせることを難しくさせ、学習活動以外のその他の活動においても教育的効果の低下につながる事が考えられる。このようなことから、やはりユニバーサルデザインの教室環境づくりは生徒にとっても教師にとっても非常に効果的であることが考えられる。また、それは学級に在籍

する多様な生徒が自らの能力を活かしてよりよく生きることや、生徒の自己指導能力を育むために重要な一要素となることが考えられ、発達障害等への対応に関心が高まっているこれからの学校教育に必要となるのではないだろうか。

教室掲示を学級経営の視点から考えることも重要となる。河村（2010）は、望ましい学級集団の要素として「集団内の規律、共有された行動様式」「集団内の子ども同士の良好な人間関係、役割交流だけではなく、感情交流や内面的なかかわりを含んだ親和的な人間関係」「一人一人の子どもが学習や学級活動に意欲的に取り組もうとする意欲と行動する習慣、同時に、子ども同士で学び合う姿勢と行動する習慣」「集団内に、子どもたちの中から自主的に活動しようとする意欲、行動するシステム」（p.59）の4つを挙げている。掲示物として学級目標や各活動の役割分担を示すことは「集団内の規律、共有された行動様式」を構築することにつながる。また、教師が教室掲示を自身の指導方針とうまくリンクさせ、生徒の活動が円滑になるように利用することができれば、それは「一人一人の子どもが学習や学級活動に意欲的に取り組もうとする意欲と行動する習慣、同時に、子ども同士で学び合う姿勢と行動する習慣」や「集団内に、子どもたちの中から自主的に活動しようとする意欲、行動するシステム」の構築に大きく貢献するだろう。このように教室掲示を効果的に活用することで、望ましい学級集団の形成にもつながってくることが考えられ、さまざまな活動による教育的効果がより高まることが期待される。

これまで見てきたことから、まずはユニバーサルデザインの視点から、学級の生徒が困難を抱えないような教室環境づくり（教室掲示を含む）を行うことが必要であると考えられる。そこから教室掲示について、その掲示物はどのような指導の際に使用するのかを明確化し、そのねらいにあった場所に掲示することが効果的であると考えられる。担任の個性や指導スタイルによって掲示場所や掲示物の作成の仕方は異なり、一概には言えないが、「ユニバーサルデザインの視点」と「掲示物の使用目的」は教室掲示を行っていくときには外せない視点となるだろう。

また、本研究を行ったことで教室掲示によって教室の雰囲気が大きく違うことがわかった。本研究で取り上げた2つの教室は掲示スペースや掲示の方法が大きく違うため、教室の雰囲気の違いも顕著に表れていた。事例1の教室は、掲示スペースが非常に限られており、とてもすっきりとしている。事例2は教室の前方、後方だけでなく側面にも写真を貼るなど教室全体を掲示スペースとしており、非常に温かい雰囲気がある。

事例1のようにすっきりとした教室環境は、生徒にとって学習等に集中しやすい環境で

あることが考えられる。また教室環境がシンプルであるほど、教室環境が荒れた場合には担任だけでなく生徒もその荒れに気付きやすいため、教室をみんなで使う公共のスペースとして扱い、社会性を育むような取組を行う場合には、常に教室を整った状態にすることがより容易になるのではないだろうか。

事例2のように温かい雰囲気教室環境は、担任Cがインタビューでも述べていたように、生徒にとっても自分の部屋のような感覚を持つことができ、他にはない「自分たちだけの教室」というような、教室や集団に対しての愛着を持つことにつながっているのではないだろうか。蘭ら（2005）は、学級のアイデンティティを高めること、つまり他の学級にはないその学級独自の活動を行うことで他の学級との差別化を図ることは、学級所属感や満足感をもたらし、これによって集団凝集性を高めることができると述べている。また、河村（2010）は日本型の理想の学級集団の状態を成立させている集団の一要因として、集団凝集性の高まりを挙げている（集団凝集性とは、学級集団に対して子どもたちが魅力を感じ、自発的に集団にとどまろうとする程度のことである）。このことから事例2のように他の学級とは異なるねらいを持った教室環境づくりを行っていくことは、より良い学級集団を成立させる上でも効果的であると考えられる。

しかし、このような教室の雰囲気づくりにおいては、先ほどから述べているようなユニバーサルデザインの視点だけでなく、その学級の生徒の発達段階や学級集団としての状態を把握する必要がある。学級集団に対してどのようなねらいを持って指導を行うかによってどのような教室の雰囲気にすることが効果的かは違ってくるはずである。

このようにして教室掲示と教室環境づくりを考えると、学級内に在籍する生徒の特性に合わせてのミクロな視点と、学級という集団に対してのマクロな視点の両面を合わせて考えることが必要となってくることが分かる。どのような生徒が在籍する学級なのか、どのような課題を抱えた集団なのかによって、ミクロとマクロのどちらに比重を置くかを考慮する必要があるのではないだろうか。

第五章 まとめ

生徒が学校内で学習やその他の活動を行い、学校生活の中で最も多くの時間を過ごすのは教室であり、その教室の学習環境を作るのは主に学級担任である。しかし、はじめにでも述べたように中学校は教科担当制であるため、小学校のように担任が一日中生徒のことを自分の目で見ることができない。生徒の特性や抱える困難も違い、担任が生徒に関わる

時間が限られている中で生徒の日常的な活動の中に潜む困難さに対応するためには、まずはそれぞれの生徒に関わる複数の教員の目を通して得られた情報や保護者からの情報を集約するなどして、生徒の特性を十分に理解することが必要である。その上でその生徒の目線に立って、その生徒はどのような状況で困難さを感じるのか、どうすれば生徒はより良く活動することができるのかを考えていかなければならない。今回このようにいくつかの事例を検討する中で、教室掲示や教室環境づくりに限らず学級経営全般において、教師が生徒の目線で考えることが重要になるということを、筆者は改めて認識した。今後、学級担任として教室掲示を行っていく際には、まずその学級に在籍する生徒の発達上の特性やその他の配慮事項を考慮して配置することが必要となる。また、掲示物がどのように活用されるかを考えることも重要である。今回の事例のように、掲示スペースの中央にどのようなものを貼るのか、生徒の目線の高さには生徒に対して見せたいものを貼るなど、生徒がどのように活動するかという事と教師のねらいを合わせて配置を考えなければならない。

配置後には掲示物一つ一つについて不具合がないかを確認し、他の教員にも意見をもらうなど多様な視点で考える必要がある。また、学級集団に対してのねらいも明確化することによって、学級経営に関してさらに広い視野で考えることができるため、自身の受け持った学級をどのように育てていきたいか、学級での指導を通してどのような力を生徒に付けさせたいか、自分の考えをはっきりとさせておく必要があると感じた。

学級経営に関しての研究はまだまだ少なく教員の経験に頼るところが大きいため、どのような教室環境や雰囲気がどのような学級集団を形成する上で効果的かは一概には言えない。筆者自身、今後教員として経験を積むことで理解を深めるように努めたい。また、経験を積む中で自分の指導スタイルも少しずつ形成していくように努めたい。自分なりのスタイルを持つことは必要だが、学級内の生徒が変われば配置や色づかいなども検討する必要があることを心に留めておくとともに、その指導スタイルにおいて効果的な教室掲示の活用方法を模索していきたい。

今後は、本研究で得た視点を忘れることなく研鑽を積むとともに、教室掲示や学級経営についても研究が進められることを期待したい。

引用文献

蘭千壽・高橋知己・越良子（2005）「学級担任による学級集団の認識と指導方略」千葉大学教育学部研究紀要, 53, 181-186

有田 莊志・宮本文人（2006）「小学校の普通教室における前・横・後の壁面の掲示物とその特性：小学校の普通教室における掲示場所計画に関する研究 その 2（保育室・教室，建築計画 I）」学術講演梗概集，2006，269-270

堀内理悦子・古屋義博（2003）「特別な教育的ニーズをもつ児童生徒の学ぶ教室環境に関する一考察 -掲示物や備品に視点をあてて-」山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要，8，23-32

片山紀子（2011）『入門生徒指導 「生徒指導提要」をふまえた新しい生徒指導のあり方』学事出版

河村茂雄（2010）『日本の学級集団と学級経営－集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望－』図書文化社

瀬戸健一（2006）「消極的生徒指導と積極的生徒指導の検討の試み－生徒指導連絡協議会に参加した教師の認識に着目して－」学校心理学研究 6（1），53-65